

と罰』の登場人物達の日常生活に身近なところにあるドイツのイメージを考察する。また、19世紀のサンクトペテルブルグにおけるドイツ系移民の生活に関する歴史的事実も確認する。その上で、こういった日常生活におけるドイツのイメージが、伝統的なドストエフスキー文学研究において論じられてきた思想的問題にどのように関わってくるのかを検討する。ドイツのイメージの考察は、とりわけスヴィドリガイロフの人物像を理解する鍵のひとつでもある。

2. ドイツ製の品物と医者や家主たち

『罪と罰』の冒頭で主人公ラスコーリニコフが考え事をしながらサンクトペテルブルグの通りを歩いていると、通りすがりの酔っ払いに「おいお前、ドイツシャボ⁹⁾!」と声をかけられる。これを聞いたラスコーリニコフは自分が風変わりな帽子を被っているために目立つのがよくないと思う。

ラスコーリニコフは通りに面している大きな家に近く。この家は小さな貸間から成り立っていて、いろいろな人が間借りしているが、ここで次のように間借り人たちのことが描写される。「そこにはあらゆる種類の職人 仕立屋、錠前屋、料理女、いろいろなドイツ人、自分を売って生きている娘、下級官吏などが住んでいた¹⁰⁾。」これはこの時代にサンクトペテルブルグの町が急速に発展し、仕事を求めて田舎からサンクトペテルブルグに出てきた大勢の貧しい人々が劣悪な住宅環境で暮らしていた様子を描く有名な場面であるが、この時代のサンクトペテルブルグにはドイツ人も住んでいたのである。

ラスコーリニコフがこの家の階段を上がっていくと、引っ越しのために荷物を運び出している人々とすれ違う。「彼はもう以前から、その住居にはある家族持ちのドイツ人の官吏が住んでいることを知っていた。『ということは、このドイツ人が今引っ越していくのだ。そうすると4階には、この階段沿いのこの踊り場には、当分の間、老婆の住居だけがふさがっていることになる¹¹⁾。』」金貸しの老婆の隣人もドイツ人であった。

ラスコーリニコフはその後、金貸しの老婆の家を訪問する。彼は老婆の家の中がどのようなになっているかを覚えておこうとして部屋の様子に注意を向け、ドイツ娘を描いた粗悪な絵がかかっているのが目に留まる。「家具はすべてとても古くて、黄色の木製で、湾曲した木製の大きな背もたれのついたソファと、ソファの前の楕円形のテーブルと、窓の間の壁に取り付けられた鏡台と、壁際の椅子数脚と、小鳥を手にしたドイツ娘たちを描いた、黄色い額縁に入った安物の2、3枚の絵　これが全部

の家具だった¹²⁾。』『罪と罰』には黄色いものが繰り返し描かれていることはすでによく知られていて、これはラスコーリニコフの不安な気分を表していると考えられる¹³⁾。確かにこの場面にも黄色い品物が多いが、これと同様に『罪と罰』におけるドイツ製の品物の多さも明らかに意図的である。

ラスコーリニコフは居酒屋でマルメラードフと出会って彼の話を聞き、その後マルメラードフを家まで送っていく。マルメラードフはドイツ人コーゼルの家を借りている。家の前まで来るとマルメラードフは「あ、もううちだ、コーゼルの家だ。錠前屋の、金持ちのドイツ人の¹⁴⁾...」と言う。彼等は部屋を直接コーゼルから借りているのではなく、別の人物だがやはりドイツ人である、アマーリヤ・リップヴェフェゼリという女性から部屋を又借りしている。

ラスコーリニコフは下宿先の家賃を滞納しているために警察署に呼び出される。ここで彼はドイツ人女性が警察官と話しているのを見かける。「『ルイーザ・イワーノヴナ、お座りになったら...』と彼はさりげなく、椅子がそばにあるにもかかわらず座ることができないかのようですずっと立ったままでいた、着飾った赤ら顔の婦人に言った。彼女は『Ich danke(ありがとうございます。)]』と小声で言い、衣擦れの音をさせながら椅子にふんわりと腰を下ろした。白いレース飾りの付いた明るい空色の彼女のドレスはまさに軽気球のようで、椅子の周りに広がり、ほとんど部屋の半分を占めていた。香水の匂いが漂ってきた。しかし婦人は自分が部屋の半分を占めてしまったことや彼女から香水の匂いが漂っていることを見るからに怖気づいていて、臆病そうに、また同時に厚かましく、明らかに不安げに微笑んでいた¹⁵⁾。』彼女はドイツ語風のアクセントのロシア語を話すのであるが、ドストエフスキーは、ドイツ語の単語「とても」(ganz)をロシア語の中に取り混ぜて　とキリル文字で表記したり、ドイツ語のlとロシア語の(л)は若干発音が違うことからドイツ人の発音するロシア語の(л)を(л')と表記したりして、彼女の話し方を面白おかしく描いている。ステレオタイプなドイツ語風のアクセントのロシア語の面白さが分かるように、ここでは翻訳ではなく原文を引用しよう。

□□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

16) □

ラスコーリニコフは通りでマルメラードフが馬車に轢かれて大けがをするところに行き合わせ、彼をカテリーナの家連れて行くのを手伝う。この様子を見たカテリーナは戸を開けて外へ駆け出そうとするが、そこですぐに家主のドイツ人女性と出会う。「(前半省略)しかし、ドアのところまさにもそのリッペヴェフェゼリ婦人とぶつかった。彼女はちょうど不幸な出来事のことを聞きつけて、状況を鎮めるために駆けつけてきたのだ。彼女は非常に口やかましくてだらしのないドイツ人女性であった¹⁷⁾。」カテツ 例 兎Mも聞 月 勇む & 己 既 月 き紛虫び 玄 麗しし獅 署 や ド 系 以 ト 加 課 業 や の 事 夫 瓜 中 露 出 区 ま 環 已 義 道 た

ツ人村は主にモスクワ、ヴォルガ川付近、サンクトペテルブルグにあったが、他にもさまざまな地域に入植した。当時ドイツ人たちはロシア国内のドイツ人村に住んでいたが、必ずしも隔離されていたわけではない。

ロシアの学問は当初、主にドイツ人によって開始され、科学アカデミーの研究職を占めているのは、最初ドイツ人ばかりであった。17～18世紀のペテルブルグの科学アカデミーでは、数学、植物学、生物学、東洋学などの各分野でドイツ人の研究者が活躍し、サンクトペテルブルグの図書館のアルファベット順目録を整えたり、カムチャツカ半島の探査を行ったりしたのもドイツ人であった。職人や商人や医者もドイツから大勢サンクトペテルブルグにやってきて住むようになり、建築、劇場、新聞雑誌、教育にも大勢ドイツ人が携わっていた²⁷⁾。彼等は次第にロシア人と同化していった。

D. ダリマンによると、1750年にサンクトペテルブルグの成人の人口は74,283人で、そのうち5,735人は外国人であった。そのうち何パーセントがドイツ人であったか正確にわからないが、ドイツ人は外国人のうちもっとも大人数の集団であったので、50パーセント以上であったことは十分に考えられる²⁸⁾。1780年ごろにサンクトペテルブルグに居住していたドイツ人は16,000人から17,660人であった²⁹⁾。

日本人研究者の中では橋本伸也がピョートル大帝の科学アカデミー設立³⁰⁾や、帝政期ロシアのお雇い外国人のドイツ人が科学アカデミーに大勢いた様子を書いている³¹⁾。しかし、ロシア国内にロシア人とは異なるドイツ人の一大勢力があったと考えるのは行き過ぎであり、ドイツ人はロシア人に同化しながらやっていたということである。

これらの資料から、ドイツ人の研究者や職人たちによってサンクトペテルブルグの科学アカデミーにおける研究活動や輝かしい文化が形成され、西欧の水準に届く高い技術がロシアに導入されたこと、またその一方で、移民してきたドイツ人たち自身も皆が裕福で優秀な人々ばかりだったわけではないことが分かる。このような歴史的事実と照らし合わせると、『罪と罰』に非常に多くのドイツ人が描かれているのは、史実に合致するごく自然なことであるのが分かる。もっとも、『罪と罰』で多く描かれるのは、輝かしい業績を成し遂げたドイツ人ではなく、むしろ社会的地位があまり高くないドイツ人たちの方であり、彼らが過度な節約家である様子やドイツ語風のアクセントで話す様子が強調されて滑稽に描かれている。『罪と罰』は、ドイツ文化の影響を強く受けた当時のサンクトペテルブルグとロシアの社会を批判的に

描いていると言える。

4. どこから来たのか分からないドイツ人
再び『罪と罰』に戻ろう。

カテリーナはマルメラードフの葬式の後、家主のドイツ人女性とまた喧嘩をして、「ねえ、ラスコーリニコフさん、お気づきですか？このサンクトペテルブルグにいる外国人は皆、つまり主にどこから来たのか分からない³²⁾ドイツ人ですけれど、皆私たちよりも馬鹿だということに³³⁾！」と言う。カテリーナの文句はこの後も続き、彼女は家主の話がつまらないと言って、家主のドイツ語なまりを真似て話してみせる。ドイツ人の家主はドイツ語なまりのロシア語で「お父さんはベルリンから来た、とてもとてもえらい人だ、両手をポケットに入れてこんな風に歩いていた³⁴⁾。」とカテリーナに言い返す。

19世紀やそれ以前のロシアにおいて、ドイツ人はドイツ出身であるというよりもドイツ語話者であり、ドイツ語を話す北欧やバルト地域の外国人も含んでいて、誰をドイツ人といえよいか分からない面があった³⁵⁾。

サンクトペテルブルグにはルーテル教の教会や学校、病院などもあり、これらの学校や教会にはドイツ語のほかにエストニア語やフィンランド語を使用するところもあったが、ロシア人からはすべてがドイツ系であるとみなされていた³⁶⁾。ルーテル教の教会はサンクトペテルブルグにいくつかあったが、その中でも特に有名だったのは聖ペトロ教会である³⁷⁾。1783年のエカテリーナ 世の命令でサンクトペテルブルグの聖ペトロ学校はロシア帝国内のドイツ人学校の手本となった。この学校はロシア革命の時まで存続し、ドイツ語で授業がなされていた³⁸⁾。

現在のバルト三国には12世紀頃からドイツ騎士団が侵入し、この地域の住民たちはカトリックを受け入れ、ドイツ騎士団の支配下にあってドイツ化していた。エストニア人などは、ピョートル 世が1703年にサンクトペテルブルグの町を建設した後にロシア国内で活躍する機会を得て、サンクトペテルブルグに居住するようになっていたのである³⁹⁾。

こういった事情を踏まえると、カテリーナの言う「どこから来たのか分からないドイツ人」という表現も、ドイツ本国から来たのではなくバルト三国周辺の人々やその他の西ヨーロッパ諸国からサンクトペテルブルグにやって来た外国人が「ドイツ人」というカテゴリーに含まれていることへの皮肉だと理解できる。

このようにして、作品全体、特に小説の前半部分のサンクトペテルブルグに住む貧しい人々の日常生活の描写の中で、ドイツ人やドイツ語話者が多く登場する。『罪

と罰』にはドイツ以外の外国も描かれないわけではなく、自殺を計画しているスヴィドリガイロフがソーニャに自分はアメリカへ行くと言ったり⁴⁰⁾、亡くなったマルメラードフの法事にポーランド人が来たりする⁴¹⁾。しかし、他の外国の描写はそれほど多くなく、ドイツが圧倒的に多い。ドイツ関連の人物や品物の描写を通じて伝わってくるのはドイツ文化そのものの様相ではなく、むしろ当時のサンクトペテルブルグの社会と人々の生活の方である。もともと『罪と罰』は、サンクトペテルブルグの貧困層の生活を多く描いていることで有名な作品であるが、これらの描写は多くの場合、実質的にはドイツの人物やドイツ人と関連している。サンクトペテルブルグはロシアの他の町と比べても外国文化やドイツ文化の影響が強い町であったが、それが作品にも表れている。当時のサンクトペテルブルグの人々にとって、ドイツとは単に文学作品や哲学的著作を通じてのみ需要するものであったわけではなく、教養人のみが高尚なドイツ文化に触れていたわけでもなく、一般の人々や貧しい人々の日常生活の中にもドイツの事物は現実のものとして入り込んでいたことが分かる。

5. ラスコリーニコフとスヴィドリガイロフ

さて、サンクトペテルブルグの町に住む貧しい人々に、ドイツ人を目にする機会やドイツ製の品物に触れる機会が多くあった一方で、『罪と罰』に描かれる雑階級人たちや知識人層は、どのように町中のドイツ人を見て、どのようにドイツ文化を捉えていたのであろうか。

『罪と罰』では、ラスコーリニコフもその友人のラズーミヒンもスヴィドリガイロフも皆、ドイツ語に堪能であるとされている。ラスコーリニコフもラズーミヒンもスヴィドリガイロフも、ドイツ文化の影響を非常に強く受けている当時のロシアの知識人層の典型なのである。

『罪と罰』の最初の部分では、ラスコーリニコフは友人のラズーミヒンを訪問する場面がある。ラズーミヒンはドイツ語の翻訳の仕事を彼に分けてやろうとして、「第二にドイツ語はよく分からないから、自分で創作することが多くなってしまって、その方がかえって良い文章ができると自分を慰めている。良くならないで悪くなっているかもしれないが... 君はやるかい、やらないのかい⁴²⁾？」と言う。結局ラスコーリニコフは翻訳の仕事を引き受けるのをやめて、ぼんやりと考え事をしながらラズーミヒンのところから去る。もっとも小説の後の箇所では、ラズーミヒンはラスコーリニコフに仕事を引き受けさせようとしてドイツ語が得意でないふりをしたものの、実際にはドイツ語が得意であったとされている。

小説の後半になると、これまで読者に対して秘密にされていたラスコーリニコフの殺人の問題に関する思想が語られるようになり、ラスコーリニコフが書いた論文の内容が明らかになったり、彼がポルフィーリイやスヴィドリガイロフを相手に自分の思想を語ったりする場面が多くなったりし、小説前半で描かれたラスコーリニコフの殺人者、犯罪者としての行動や心理を裏で支えていた彼独自の思想や哲学が多く論じられるようになるが、その一方で、身近な生活の中のドイツの事物の描写は減る。それでもやはり、スヴィドリガイロフの周辺にドイツ人が登場することが多い。

スヴィドリガイロフはラスコーリニコフに、進歩的な西欧型の人間は旧来のロシア人とは違って鞭など使うべきではないという話をするが、その際にドイツ人女性に触れる。「一人の貴族が(中略)汽車の中であるドイツ人女性を鞭で打ったんですよ?(中略)さて私の意見はこうなんです。そのドイツ人女性を鞭で打った紳士には、決して同情しない。なぜなら実際のところこれは... どうして同情なんかするのでしょうか!しかし、とは言うものの、ときには、私が思うには、どんな進歩主義者でも自分を保証しかねるような、そうした癩に障るドイツ人女性がいることを声明しないではいられません⁴³⁾」

その後ルージンがラスコーリニコフ、ドーニャ、彼らの母の3人に、スヴィドリガイロフとドイツ人女性たちの話をする。「私はただ、マールファ・ペトロヴナから自分で秘密に聞いたことを言っているだけです。法律の見地からすると、この事件は大変曖昧なものだと言っておかざるをえません。ここにレッシリヒという外国人で少額の高利貸をしたり、他の仕事もしたりしている外国人女性が住んでいました。おそらく今でも住んでいると思います。このレッシリヒとスヴィドリガイロフ氏とは以前からある極めて親密な神秘的な関係にあったんです。彼女のもとに遠縁の親戚の娘、おそらく姪で、耳と口が不自由な15歳か、14歳くらいかもしれないのがいて、彼女をレッシリヒがやたらと憎んで、ちょっと何かあるたびに叱りつけ、むごたらしく叩いたりしたんです。あるとき彼女は屋根裏で縊死していたところを発見され、自殺だと判定されました。通常の手続でそれは済みましたが、しかしその後、その子供はスヴィドリガイロフのために残酷な辱めを受けていたという密告があったんです。実際のところ、これらはすべてははっきりしなくて、密告は別のドイツ人女性で信用できないような札付きの者から出たんです⁴⁴⁾。」

『罪と罰』ではスヴィドリガイロフについての悪い噂が絶えず描かれる。しかしよく作品を読み込むと、噂の

多くはどうやら嘘らしく、実際には彼はそれほど悪い人物でない可能性が高いことが分かる。例えば、スヴィドリガイロフは妻マールファ・ペトローヴナを殺害したと他の登場人物達皆から思われているが、本人は妻を殺害していないと語っている。ラスコーリニコフはスヴィドリガイロフが下男のリリップを拷問によって殺したという噂を聞いているが、これに対してドゥーニャは、リリップは単に元から病気でいて自殺しただけだと話している⁴⁵⁾。スヴィドリガイロフは自殺する前にソーニャに自分の金を渡しているが、これによってソーニャが継母の連れ子たちを孤児院に入れて自分はラスコーリニコフについてシベリアへ行けるようになったのであって、この点においてはスヴィドリガイロフも善行を積んでいる。

ルージンもここで、スヴィドリガイロフとドイツ人たちの関わりについて奇妙な噂があったものの本当かどうか分からないという話をしたわけである。これをスヴィドリガイロフ自身の、癩に障るドイツ人女性もいるという話と照らし合わせてみると、スヴィドリガイロフには実際にドイツ人たちとの付き合いがあり、しかし彼らはスヴィドリガイロフにとってあまり良い人たちでなかったことが推測できる。癩に障るドイツ人女性というのは、密告をした札付きの信用できないドイツ人女性の事であるかもしれない。

スヴィドリガイロフが自殺を思い至るときにも、彼は酒場であまり印象の良くないドイツ人を見かける場面がある。「忌まわしい歌うたいの合唱隊と、何か赤い鼻の道化らしい、しかしなんとなく非常に憂鬱そうな、酔っ払いのミュンヘン生まれのドイツ人が、見物人たちを楽しませていた⁴⁶⁾。」とされている。

ラスコーリニコフが自首しに行く場面でも、彼はドイツ人を見かける。「ほら、あの太った人、ドイツ人に違いない、僕にぶつかった、彼は誰にぶつかったか知っているんだろうか⁴⁷⁾？」

さらに『罪と罰』にはドイツ系移民の直接的な描写のほかに、ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラー(1759-1805)への言及が多く見られる。これもラスコーリニコフやスヴィドリガイロフの両方に多く関わっている。例えば、スヴィドリガイロフはシラーについてラスコーリニコフに次のように言う。「じゃあ、あなたは力を求めているのですか。あはは、あなたは今私を驚かせましたよ、ロジオン・ロマーノヴィチ、もっとも、こうなるだろうとあらかじめ知っていましたがね。あなたは私に淫蕩や美学について解説している！あなたはシラーだ、あなたは理想家だ！もちろん、すべてがそうあるべきで、もしそうでなかったら、それこそ驚かないといけ

ないのですが、しかし実際にこうとなると、やはりなんとなく変ですね...ああ時間が少ししかないのが残念です、あなたというのは本当に興味深い人ですからね。ところで、あなたはシラーが好きですか？私は大変好きなんです⁴⁸⁾。」その後もスヴィドリガイロフは繰り返し、ラスコーリニコフのことを「シラーだ、我らのシラーだ、シラーだ⁴⁹⁾。」と言ってからかう。

『罪と罰』の作品世界において、シラーやシラーの文学作品とは高邁な理想を表すものであり、それと同時に現実的ではない理想でもある点で皮肉の対象にされている。シラーという言葉は詩人の名前であることを越えて、主人公ラスコーリニコフが家族や貧しい人々を助けるために優れた人になりたいと考える純粋な心を持っていることと、とはいえこれが実現不可能な考えでありそのための老婆殺しなど論外であったことの両方を表している⁵⁰⁾。シラーを好きだと言う理由からラスコーリニコフをからかうスヴィドリガイロフにとってもやはりシラーは好きな作家であり、高邁な理想である。

シラーの文学の激情的な理想主義の特徴を考慮すると、先にスヴィドリガイロフがドイツ人女性と「極めて親密な神秘的な関係」にあったことも少し理解できてくる。シラーの文学の雰囲気や熱狂的に信じた結果、スヴィドリガイロフはドイツ人女性との間に精神的で親密な友情や神秘的な関係が成立すると真剣に考えて行動していたが、これが周囲には理解されずに、別のドイツ人女性から彼の行動は姪が目当てだったと誤解されたのではないか。彼が高邁なシラーの文学作品を通して期待していたドイツのイメージと、現実の一般的なドイツ人達は異なっていたのではないか。

ラスコーリニコフはスヴィドリガイロフのことを嫌っているが、この二人には多くの共通点があり、彼らはシラーを巡って共感し合っている面がある。サンクトペテルブルグの知識人たちに強い影響を与えたドイツ文学者やドイツ哲学者は多種多様であるが、その中でもシラーの存在は特に大きい。

6. ドイツを描く他のロシア文学作品

ドストエフスキーの他の文学作品のうち、ステレオタイプなドイツ人が描かれるのは『鱈』(1865)である。この作品もサンクトペテルブルグを舞台としているが、百貨店の内部の様子が描写され、さらにそこに鱈を展示しに来たドイツ人商人とその母親がコミカルに描かれて、サンクトペテルブルグに起こりつつあった資本主義の動向の片鱗が批判的に描かれる。

『賭博者』(1866)でもドイツが描かれる。『罪と罰』

と非常に近い時期に書かれたこの作品はドイツを舞台としていて、物語はドイツ国内の保養地でロシア人やイギリス人、フランス人、ポーランド人たちの社交界が描かれる。主人公は自分がロシア人であることや、ロシア人には西欧人とは異なる面があることを意識していて、「だって本当に、ロシア式めちゃくちゃと、誠実な勤労によるドイツ式蓄財法と、一体どちらがより醜悪か、まだ明らかになっていないでしょう⁵¹⁾？」、「僕はドイツ式の偶像にひれ伏すよりも、一生キルギス人の天幕で放浪しつづけていたいんですね⁵²⁾。」、「僕はここに少し前に来たばかりだけど、でもやはり、ここですでに気づいたり、確かめたりしたことがあって、僕の中のタートルの血を憤激させるんです⁵³⁾。」などと言っている。ここで興味深いのは、彼がロシア古来の文化だけを近代的なドイツ文化と対比させているのではなく、かつてはロシアが朝貢したキプチャク汗国内の民族で、その後はロシアに支配されるロシア国内の少数民族となったタートル人やキルギス人の特徴をロシア人自体の特徴として、これをドイツ文化と対比的にとらえていることである。ドイツとロシアそのものの対比でありながら、ロシア人の中におけるタートルやキルギスの文化をドイツと対置している。多くの国から影響を受けて築かれたロシア文化の面白い点である。

『冬に記す夏の印象』(1863)は『罪と罰』より少し前に書かれたが、作家ドストエフスキー自身が西ヨーロッパを旅行した時の旅行記で、ドイツ滞在にも触れている。ドストエフスキーの現実のドイツの社会に対する批判的な考え方が分かる。ドストエフスキーは子供の頃からドイツ文学に親しみ、彼自身もドイツ文化の影響を強く受けているが、その一方でときにはドイツ文化を皮肉な視点から描写している。ドストエフスキーのドイツ文化理解がよく分かる旅行記である。

しかし『賭博者』や『冬に記す夏の印象』に対して、『鱈』や『罪と罰』では、ドイツそのものが作品の舞台となることはない。『鱈』もそうであるが、『罪と罰』の舞台はあくまでもロシアの町サンクトペテルブルグであり、サンクトペテルブルグの中にあるドイツ的な要素とドイツ文化が描かれる。『罪と罰』はドイツ文化やドイツそのものを描く作品ではなく、ロシアへのドイツ文化の影響やロシア国内におけるドイツ人とドイツ文化の位置づけを描く作品である。ドイツにおけるドイツ文化そのものとは必ずしも同じではない、ロシアの中のドイツ文化が問題となっている。

ロシア文学作品におけるドイツ人の形象で有名なのは、イヴァン・ゴンチャロフ(1812-1891)の長編小説『オ

ブローモフ』(1849-1859)のシュトリツであろう。彼は勤勉で、ロシア人から見た典型的なドイツ人のイメージを体現している。A.S. プーシキン(1799-1837)の『スペードの女王』(1833)の主人公ゲルマンもドイツ系である。この作品のテーマには金銭の問題というのもあり、これがロシア人から見たドイツらしさとも関わっている。これらの作品でも、ドイツにいるドイツ人ではなく、ロシア国内のドイツ系の人々が描かれている。ロシアにおけるドイツ観念論哲学の受容には、イヴァン・キレーエフスキー(1806-1856)やニコライ・スタンケーヴィチ(1913-1840)が大きな役割を果たした⁵⁴⁾。ワシーリイ・ジュコーフスキー(1785-1852)はドイツ文学を多くロシア語に翻訳したが、彼の翻訳は原作を超える名作として知られている⁵⁵⁾。ドストエフスキーの文学作品におけるドイツ系移民の形象も、これらのロシア文学の伝統に連なるものである。

7. 結論

『罪と罰』が、ドイツを中心とした西ヨーロッパの哲学と文化をロシアに取り入れたときに起こる問題を描いた小説であり、西ヨーロッパから流入した思想とロシアの土着の民衆が対照的に描かれていることは、すでに広く知られている。ラスコーリニコフは西欧文化やドイツの哲学の影響を強く受けた人物であり、ナポレオンをモデルにして、特別な人間である非凡人には凡人にない権利があるとする理論を構築する。この作品の主要な筋書きには、ソーニャが体現するようなロシア正教とロシアの土着の民俗文化⁵⁶⁾によってラスコーリニコフが救済されて復活するという面がある。ラスコーリニコフが過ちを犯したのには、彼がロシア人でありながらも教育を受ける過程で西欧の外国文化の影響を強く受けすぎ、土着のロシア文化から切り離されてしまっていたせいであるというのが、伝統的な『罪と罰』の理解である⁵⁷⁾。『罪と罰』にはラスコーリニコフやスヴィドリガイロフが繰り返しシラーに言及する様子が描かれ、彼らがシラーに傾倒しつつもシラーに反発する様子が分かる。当時のロシアの知識人たちのものの考え方にはドイツ文学が深く浸み込んでいることがここからも理解できる。

本論ではこの伝統的な解釈を裏付けるものとして、ラスコーリニコフのような知識人層が個人的に本を通じてドイツ文学や哲学を受容していたのではなく、当時サンクトペテルブルグの町自体がドイツ文化の影響を強く受けており、人々の日常生活に身近なところでドイツ人やドイツの品物があふれていたこと、『罪と罰』にはこの様子が描写されていること、ラスコーリニコフが語るシ

